駅前、見上げた夕空

秋居らむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
駅前、見上げた夕空

【Ｎコード】
Ｎ９５６９Ｑ

【作者名】
秋居らむ

【あらすじ】
期末テストを控えたある夏の日。なんだか兄の様子が変だと気付いた私・遠山勇は、幼馴染の千葉零二や先輩の協力のもと、原因を探るのだった。

第1話（前書き）

初めて投稿します。よろしくお願いします。

第1話

梅雨が明け、すぐそこに迫った期末テストにざわつく教室。そんなクラスメート達を私は冷めた目で見つめている。
馬鹿にしているわけではない。むしろ成績は中の下、一緒になってそわそわしていないと変に見られるだろう。何と言っても、今回のテストで進学先が決まるといっても過言ではないのだ。まあ、ほとんどが持ち上がりで系列の高校に行くのだろうが。
「何睨んでるんだよ」
後ろからパンとはたかれ我に返る私。
「痛い。ていうか、別に睨んでないから」
頭に手をやりながら振り向けば、幼なじみの零二がニヤニヤしながら見下ろしてくる。
「帰るぞ。今日は一緒に勉強するんだろ？瀬奈君待ってるぞ」
「ごめん、すぐ準備する」

同じマンションなので一緒に帰るという、小学生の頃から約九年も続く習慣を律儀に守ってる私達。きっと周りからは付き合ってるとか思われているのだと思うが、決してそんな甘酸っぱい関係ではない、断じて。
「じゃ、荷物置いたらすぐ行くから」
「分かった。お兄ちゃんにも伝えとく」

「ただいま。お兄ちゃん、零二もうすぐ来るって。今日は私の部屋でするからよろしくー」
「…」
「お兄ちゃん？聞いてる？おーい」
「あ、ご、ごめん。勇（いさみ）帰ってたんだね。おかえり」
「…ただいま。どうしたの、体調悪いとか？」

「そ、そんなことないよ。零二君今日は来ないの？」

兄・瀬奈の様子がおかしいことに気付いたのはここ最近のこと。常に心ここにあらずで、会話が成り立たないことが増えてきている。

「お邪魔しまーす。瀬奈君今日もよろしくです」

律儀に頭を下げる零二を尻目に、私はもう一度説明することなく、兄を自室に連れていくのだった。

勉強は嫌いだ。試験の為なんかにするその場しのぎの勉強なんて尚更嫌いだ。零二と兄は仲が良い。わざわざ復習しなくてもいいくらい零二は頭がいいのに、兄と話したいのかテスト前になると決まってうちに来て勉強をするのだ。

「ちょっと。今日本史じゃなくて数学でしょ？こんなんじゃ二人のせいで赤点取っちゃうよ」

わけの分からない話で盛り上がる彼らに、私は嫌味をたっぷり込めて呟く。

「日本史じゃねえよ。しっかしお前もったいないよな。せっかく勇って名前なんだから、少しは新撰組に興味くらい持てよ」

どうやら昨日のドラマの話でもしているようだ。

「しょーがないじゃん。興味ないものはない」

「じゃ、その名前瀬奈君に譲れ」

「無理」

好きでこんな名前になったんじゃない。完全なる母親の趣味である。ちなみに兄はＦ－１好きの父の趣味で名前が決まったそうだ。

始まってしまえば真面目なもので、大人しく勉強をする。分からないところは兄に教わるというのがいつもの流れ。

ピピッピピッ

「あ、ご、ごめん僕だ」

私が言うのもなんだが、兄は気が弱く大人しくて友達も少ない。携帯電話が鳴ることも滅多にない。

「あの…ごめん二人とも。ち、ちょっと今から出掛けなきゃいけなくなっちゃった」

「今から？もう外暗いよ。どこ行くの？」

「や、ちょっと友達のところに…夕飯までには帰る、と思う」

そう言って、返事を待たず出て行ってしまった。

「…最近、お兄ちゃんおかしいんだ。こんなことがよくあって」

「彼女でもできたんじゃね？」

「それはない」

「即答かよ」

そう。絶対それはない。学校内の恋愛話で知らないことはない、情報通の先輩に聞いても有り得ないの一言だった。信頼できる筋の情報なのだ。

「そっか。じゃあどうしたんだろうな。」

「ま、すぐ帰るって言ってたし、心配はしてないんだけど」

夜七時。ちょうど零二と入れ代わりで兄が帰ってきた。

「おかえり…って、お兄ちゃんどうしたの！？服ボロボロだけど！」

「え、あ、その…あ、さっきそこで転んだんだ」

なんて分かりやすい嘘を！

「分かった。お兄ちゃん、私何も聞かないから。でも何かあったら私に相談くらいしてね。

あ、それから、最近この辺りで通り魔が多いらしいから、出掛ける時は気をつけてよ」

「う、うん。分かった」

これじゃどっちが兄か分からないや。

物心ついた頃にはこんな力関係ができていた。小さい頃から、兄を助けるのが私の役目。役目を果たすことで自分の存在意義を確認してきた。そんな兄が、私に隠し事をしているのが気に食わなかった。

第2話

あまりにも挙動不審な兄について歩きながら考え込んでいると、ちょうど目の前の踏み切りを乗るはずの電車が通り過ぎて行った。田舎ゆえ次が来るまで二十分は待たなければならない。

「あーあ。遅刻かな」

「い、いや…余裕で間に合う」

独り言に返事があったことに驚いて振り向くと、荒い呼吸の零二が近付いてきた。

「だ…ダッシュしたんだけど…」

「息が整ってからでいいよ、喋るのは」

せわしなく胸を上下させる彼の横を黙ってついていく。さすがにホームには誰もいない。

「昨日俺が帰った後、瀬奈君ちゃんと帰ってきた？」

「ああ、零二と入れ替わりだったよ。やっぱり様子がおかしかった」

帰ってきた時の状況を説明すると、少し考えた後、

「いじめられてんのかな」

実は少し想像していたことだったので、零二のその意見を否定する気はなかった。むしろ、やっぱりという気持ちの方が強かった。

その日は授業中、休み時間、放課後までのほとんどの時間を、私は兄について考えることに費やした。

そうと決まったわけではなくても、少しでもその可能性があると思うだけで心が痛む。それが顔に出ていたようで、今日もまた迎えに来てくれた零二に心配されてしまった。

「お前が考えたって仕方がないことだろ」

「そうだけど、やっぱりつらいよ」

泣き出しそうな私の頭を、彼はいつものように軽くはたく。それ

をきっかけに、私の涙は一斉に溢れ出すのだった。こうなってしまっては収まりがつかない。彼もそれは分かっているようで、学校を出てすぐの公園で少し時間が過ぎるのを待つことにした。

「あのさ」

泣き止んだことを確認してから、零二はこう切り出した。

「あと、つけてみない？」

さっきまで泣くことに必死だった私の頭は、すぐに飲み込むことができずにぼんやり彼の顔を見つめ返すことしかできないでいた。

「だーかーら、尾行だよ尾行！瀬奈君が出掛けたらそのあとをつけてみるんだよ」

それでもまだしっかり理解できずにいる私にイラついたのか、今度は愛のない一発を頭にもらってしまった。

しばらく経ち、ようやくはっきりした頭で真剣に悩んだ結果、零二と二人で兄を尾行してみることにした。いじめられているということ、それから最悪の状況を考え、少しのお金とバットを持っていくことにした。中学生の頭ではこれが精一杯だった。

作戦決行は今日からが理想だったが、兄が出掛ける日（それも呼び出されて）ではないと意味がないので、いつでも決行できるよう一旦家に帰り尾行の準備をすることにした。

第3話

「あ、勇おかえり。今日も勉強するの？」
家に帰ると、リビングで寛いでいる兄の姿があった。
「ただいま、今日もするよ。もうすぐテストだもん」
そう返事すると、すぐに私は物置部屋に向かった。

「たしか、ここにバットがあったはず…」
小学生の頃、地域のスポーツサークルでソフトボールしていた。その時使っていたバット、まだ捨ててないはずだ。
「あった！」
ケースも運良く残っていた。これで持ち運びの際も不審に思われることは少ないだろう。他にも使えそうなものがないかと引き続き漁ってみる。双眼鏡くらいなものだろうか。しかしあまり荷物が多くなっても仕方がないと、探すのはそこまでにした。

「もう七時か。じゃあ俺そろそろ帰るわ」
「あ、私コンビニ行くし一緒に出るよ」
兄の前では話せないことが多過ぎて、零二とともに外へ出る。コンビニに行くというのはもちろん嘘。別の階にある彼の部屋の前で、少し話をすることに決めていた。
「今日は出掛けなかったなあ瀬奈君。高校もテスト前だし、テスト終わるまで動かないかもしれねえな」
確かにそうかも、と納得しかけたが、いじめられてた場合そんなこと関係あるのだろうか。いじめる側の心理なんて分からないので断言できないが、と私は意見した。
「そうだな。まあ尾行は決定事項だし、いつでもできるよう準備だけは万全にしとかないとな。

あ、お前ちゃんと勉強しとけよな。尾行が理由で補習だと俺のせいにされかねねえし」
「そんなことしないもん！」
「はいはい、分かった分かった。とりあえず、瀬奈君の様子で何か少しでもおかしいことあったら俺に報告してくれよな」

今日はなんだかいろいろあって疲れたな。
兄がいじめられているかもしれないこと。いじめられていなかったとしても、何か隠し事をしていること。零二の前で大泣きしてしまったこと。零二と一緒に兄を尾行することになったこと。
一人で考えていても悪い方にばかり想像が膨らみそうなので、極力忘れるようにしよう。こんな時に零二がいてくれて良かった。協力してくれることが本当に有り難い。
そうだ、兄の学校生活に何かヒントがあるかもしれない。明日早速先輩に聞いてみよう。情報通の先輩のことだ、何か知っているかもしれない。
そんなことを思いながら、今日はもう寝ることにした。

第4話

翌日、早速先輩にメールを送った。
「最近、兄の、様子が、変なんですけど、何か、心当たり、ありませんか…っと。こんな感じでいいかな」
「それで充分だな」
「よし、送信！」

先輩こと桜木雅世は兄の同級生で、私とは去年まで同じ部に所属していた為に繋がりがあった。その頃から学年問わず人脈が広く、私たち後輩の間でも相談事なら桜木先輩と決まっていたものだ。
「速っ。もう返事来た」
「先輩なんて？」

『瀬奈か～。そうだなぁ、特に変わったところはないと思うけど。何かあった？』

「だって。先輩は信用できるし、お兄ちゃんのこと言ってみようと思う」
「うん、桜木先輩なら俺も大丈夫だと思う。けど他言無用ってことだけは言っとけよ」
そうして私は通学電車の全ての時間を使い、上手く伝えられるよう必死で文章を考え先輩に送信した。

先輩とはそのまま放課後まで何通かやりとりをし、今日の放課後、零二と三人学校近くの喫茶店で会うことになった。
「おまたせしました。お久しぶりです先輩」
「そんな待ってないから大丈夫。じゃ、早速話してもらおうかなっ」
と、これまでのいきさつや私たちの考えてることを洗いざらい話

した。先輩はしっかりと相槌をしてくれたり、考え込むようなしぐさをしたりと真剣に聞いてくれた。話し終えると、先輩は薄く微笑んだ。

「大丈夫だよ。瀬奈はいじめられてなんかいない。たしかに少し気が弱いというか、そういうところはあるけど心配はいらないよ」

彼女が言うのだから大丈夫だろうと、桜木先輩にはそう思わせる不思議な説得力がある。今だって、

この言葉で救われた気持ちになっている。というよりも、最初から先輩に私たちの考えを否定して欲しく思っていた。

「でも、何だろうね。妹の君に言うのもアレなんだけど、私が見てる限り瀬奈に学校以外で会う友達がいるかなあって。メールで呼び出されたんでしょ？気になるなあ」

「や、平気です。私もそう思ってますから。だってお兄ちゃん、私がいないとダメだし…。あ、中学まで一緒で高校が別の友達とか。先輩心当たりないですか？」

う～んと考え込むこと数分、結局思い当たる人物がいなかったようだ。ややムキになったように先輩は、

「なんか悔しいから卒業アルバム持ってくる！家すぐそこだし！」

言うが早いか、先輩は店を飛び出していってしまった。

「大丈夫か？先輩」

「私たちの為にしてくれてるんだもん、大丈夫だと思う。でも、あんな急に出て行くとは思わなかったけどね」

苦笑いを交わす。

「考えすぎて頭疲れたわ。何か甘いもん食おうぜ」

「私もそう思ってたんだ！すいませーん」

それから約二十分たった後、先輩は大荷物で帰ってきた。

第5話

「先輩、すごい荷物ですね」
今度は先輩に向かって苦笑いを作って、テーブルの上に並べられたものを見遣る。
「何か思い出せるものがあるかと思っていろいろ持ってきた。いきなり尾行して危ない目に遭うよりは、ある程度予想していった方がいいかと思ってさ」
私と零二は改めて先輩に頭を下げた。

私たち兄妹、零二、桜木先輩はみんな同じ中学校で、その後卒業した兄と先輩はエスカレーターで系列の高校に進学したのだ。同じ中学に在籍していたと言えど、アルバムの中に見覚えがある顔はやはり少ない。知っているのは部活動の先輩と、目立っていた人数名くらいなものだ。
「あ、この人知ってますよ！すっごくかっこよくて、私の周りでもすごく人気があったんですよー」
「へえ、森田君かあ。たしかにかっこいいけど、性格がちょっとね」
「この人はどうですか？ちょっと地味目っぽいけど、整った顔してますよね」
「大野君ね。この子大人しかったけど陰で人気があったなあ。今同じクラスだけど、別の中学から来た子と付き合いだして明るくなったんじゃないかな」
「そうなんですか！じゃあこの人はこの人！」
本来の目的など忘れたかのように、私と先輩はアルバムでひとしきり盛り上がった。隣では少し不機嫌なような呆れたような顔の零二が、別の写真を見漁っている。
「あれ、こいつどっかで…」

ふと零二が一枚の写真で手を止めた。
「あ、私この人知ってるよ」
覗きこんだ私の目に飛び込んだ人物は、知り合いではないが一方的によく見かけていた男子生徒の寺島だった。
「私吹奏楽部じゃない？たしか軽音楽部だったと思うんだけど、楽器置き場が一緒だったからよく見かけてた」
私の言葉を聞いているのだろうか、彼は黙り込んで必死に記憶を辿っているようだ。同じように先輩も黙って何か考え事をしている。急に静かになったテーブルで、私は別の写真群を漁り、一つ取っては置き、取っては置きを繰り返し、その場にある大半のものに目を通した。

「「思い出したっ！」」
わっとびっくりして顔を上げた私。二人揃って突然声を上げたものだから、他の客たちも同様に驚いているのが見て取れた。どっちの話から聞いていいのか分からずに、きょろきょろと交互に二人の顔を見ていると、先に口を開いたの先輩の方だった。
「瀬奈と寺島は中二の時に同じクラスでよく一緒にいるのを見たことがあるわ。でも中三でクラスが別れてからはあんまり一緒にいるのを見なくなったけど。仲が良かったのは確かよ」
興味深げに先輩の話を聞いた零二が口を開く。
「いつだっけな。たぶん四月頃だったと思うんだけど、学校の近くで瀬奈君と一緒にいるのを見たんだよ。制服はたしか違ったような」
「隣の市の男子校ね。寺島は私たちとは別の高校に進学したから。四月って数ヶ月前ね。ということは、あの二人にはまだ繋がりがあるってことか」

二人の会話を聞きながらも、若干置いてけぼりになってしまった私。しかし、いじけているわけではない。私の為に、私と兄の為に、ここまでしてくれる彼らの存在に感謝の気持ちを抱いていたのだ。

兄の隠し事が気に食わないとか、兄には私がいないとダメとか、兄の気持ちなんてお構いなしに自分本位で物事を考えているような私にとって、この二人の存在は私が変わるきっかけになるかもしれない。
「どうした？さっきから静かだけど」
「う、ううん、何でもない！なんか、話が進展してきたなって思って」
こういう時、零二は必ず私の様子を気にして見ていてくれる。一緒にいて心地が良い理由だと思う。
「で、二人はどうするの。先に寺島にコンタクトを取ってみるか、尾行をするのか」
少し悩んだけど。
「まずは尾行することにします。たぶん危なくはないだろうし、危なくなったら逃げます」
「瀬奈置いて？」
「お兄ちゃんの救出は零二に任せます」
「俺かよ」
「寺島さんと連絡が取れたとして、もし兄にそれが伝わってしまうとまずいかな、と」
「それもそうか。
良いコンビだし、二人なら大丈夫そうだね。また何か困ったことがあったら連絡ちょうだい。高校の方でも動きがあったら連絡するね」
「ありがとうございます！」
二人揃ってお礼を述べ、その日は解散となった。
そしてまた、兄が動くのを待つ日が続いた。

第6話

桜木先輩と会った日から数日。とうとうテスト期間に突入してしまった。

これまで零二は、テスト前に勉強を教えてもらうことを理由に我が家へやって来ていたのだが、その口実が使えるのも残り僅かとなっていた。

「テスト始まっちゃったね。お兄ちゃんのことが気になって勉強どころじゃなかったんだけど」

勉強はもちろんしていたのだが、独特の緊張感の中で実力は発揮できそうにない。ここ一週間は兄の行動を気にしながらの勉強だったので、なおさら頭になど入っているはずがなかった。

「俺もだよ」

「うそー。そういって、余裕で満点取っちゃうようなやつだよ零二は」

「ないない、今回は本当に自信ねえんだって」

「今回は、ねえ」

だらだらと、この近いような遠いような距離を歩くこと十分。ちょうど汗が滲んできた頃に学校に到着する。テストが終われば、夏休みまであと少し。

「じゃ、またね」

ひらひらと手を振ると、零二は昇降口より一番近い教室に入っていった。私のクラスはというと、昇降口から最も遠い部屋、廊下の突き当たり。遅刻寸前のときは短距離走者のように颯爽と駆け抜ける。まあ、走らないことの方が少ないのだけど。

テスト初日は無事終了。無事といっても、赤点をぎりぎり免れた

とかそれくらいの段階ではあるが、この際そんなことは気にしていられない。
高校も同じくテスト期間中であり、午後からの兄の様子を探る為には先回りをしなければならない。
敷地は別にあるものの、幸い中学も高校も校門は近くにあった。
テストが終わると同時に、私は零二と合流し、校門の張り込みをすることにした。もし兄がこのままどこかへ行きそうならついていけばいいし、そのまま家に帰るなら、零二はマンションも一緒だしそのまま各自家に帰ればいいだけのことだ。さすがにテスト初日だし、これからの数日間のことを考えれば、兄は真っ直ぐ家に帰るだろう。

しかし、予想に反してこの日、兄は行動に出た。

第7話

校門を出た瞬間、兄は携帯電話を取り出し忙しそうにメールをしているようだ。見慣れない兄の姿に少し違和感を覚える。
「お兄ちゃんが携帯いじってる…」
「感動するとこ間違ってるから。ほら、あんまり大きな声出すと見つかるぞ。静かについて来い」
しばらくして駅に差し掛かった。このまま駅に入り電車に乗るのか、乗ったとしたら家の方向か逆方向か、はたまた通り過ぎて別の場所へ向かうのか、緊張の一瞬。手汗がひどい。

兄は駅に入ることなく、そのまま真っ直ぐ通り過ぎた。
動いた！
私の心は緊張感で満たされていた。隣では零二がニヤっと片方の口角を挙げ、ついてくぞと小声で呟いた。

駅から数十メートル、兄はついこないだ私たちが桜木先輩と秘密会議を行った喫茶店へと姿を消した。
外から様子を窺う。どうやら兄はうまいこと窓側のテーブルへと案内されたようだ。私たちは、気付かれないかどうかの不安と、様子見しやすい席で良かったという安堵の半々の気持ちで事の成り行きを見守ることにした。

それから五分と経たないのち、私にとってはよく知っている、零二にとっては二度目（写真を合わせれば三度目）となるあの顔が勢いよく店内に雪崩込む姿が目に入った。
「あ！」
私と零二はお互い声にならない声を上げ顔を見合わせた。寺島だ。あの日の結論は当たっていたのだ。

兄と向かい合わせに座った寺島は、席に着くなりいそいそと鞄から雑誌数冊を取り出し、一冊ずつ開いては兄に説明しているらしかった。
盛り上がってる様子が見て取れた。
「なんか雑誌見てるっぽいけど、こっからじゃよく見えねえな…って、勇？」

大袈裟じゃなく、心の底から安心しきってもう、尾行していたことなんて忘れていた。
兄妹をやってきて、いじめられてる兄を助けたり、同級生より私の友達とおままごとする方が楽しいと寄ってきたり、当時の兄を考えながら今の姿を見ると、やはり感慨深いものである。って、こんな上から目線だからいけないんだ。ちゃんと兄の人格を尊重しなければ。
「お、お兄ちゃんにもと、友達が…」
といった想いを、この一言に込めた。
零二は私のことを変に思っただろうか。
視線を感じる。きっと私の反応のなさを訝しく感じているのだろうが、もう少しだけ、浸らせてください。

「で、どうする？」
はっと我にかえった私に、もう一度問いかけられる。
「これからどうするよ。思い切って中に入って、探り、入れてみるか？」
少し考えたのだけれど、感動しきって緊張感が途切れてしまったことで尾行していたことがばれてしまいそうな気がしたので、今回は一旦ここまでということにしておいた。
しかしまあ、ここまでくれば何を隠れてこそこそやっているのかは気になるので、尾行は続行。ただしテストに集中する為に今週はお休みということで落ち着いた。

第8話

無事テスト返却が終わり、私はなんとか赤点を免れることができた。零二はというと、全教科余裕の九十点越え。こういう奴って本当にいるんだなあと素直に感心したのだった。

進路とか塾とか、話はわりと勉強に関する話が多いのだが、やはり私にはどうでもいいことのように思えていた。なんとなく、零二と一緒にいるだけで落ち着かない気持ちになる。だから勉強云々というより、変な緊張感からか何に対してもどこか上の空になりがちなのだ。

「って、聞いてる？」

はっと我に返ると、少しいらついたような鋭い目で零二がこちらを見つめていた。

「ご、ごめん」

「お前最近変だぞ。前からよくぼーっとしてること多かったけど、最近特にひどい」

「ごめん。特に何かあったわけじゃないんだけど。

…お兄ちゃんのことも解決しそうだし。でも何か落ち着かないというか、どきどきするの」

私は正直に話した。理由が分かればいいな、とか、その程度の思考で発した言葉だったのだけれど。

「そ、そっか」

と、なぜか零二は急にそっぽを向くのだった。変なの。

兄は出掛けたのかまだ帰っていないのか、いないらしかった。

「無用心だなあ。鍵掛けていけばいいのに」

鞄は置いてある。ということはコンビニにでも行っているのかな。
ふと見ると、学校の鞄とは別に手提げ袋があるのが目に付いた。普段ならそんなこと気にはならないはずだが、今日は無性に気になったので、悪いとは思いつつも中を覗かせてもらった。
「何だろ、これ」
中には小さい袋がいくつかあり、さらにその中には針金のような、テグスのような線がとぐろ状になって入っていた。
と、その時玄関で扉が開く音がした。兄だろう。手に取ったものを急いで手提げ袋に戻し、元あったところに置いた。
「ただいま」
「おかえりお兄ちゃん。鍵かけないと無用心だよ。どこ行ってたの。コンビニ？」
さっきの行動を誤魔化すように、私は無意識に饒舌になっていた。たぶんそんな私の様子をおかしく思ったのか、兄も少しそわそわしているように感じられた。私が鞄の中を見たことが感付かれたかもしれない。
その日は夜まで、ずっと妙な雰囲気が続いた。やはりあの鞄にあったものが、一連の兄の行動と関係しているのだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9569q/

駅前、見上げた夕空

2011年2月26日14時10分発行